

「幽玄」用例注釈（一）

——俊成の用例について——

本稿は「幽玄」の和歌関係の用例の注釈を試み、そこから「幽玄」のより精確な考察を目指すもので、まず俊成の「幽玄」の用例を採り上げる。俊成以前の諸用例も併せて見るのがよいかとも思うが、紙幅の都合などの事情で別に採り上げることにした。

「幽玄」の用例が歌合の判詞に見られる場合は、その判の対象とした歌も二首ともに挙げる。本文は『新編国歌大観』によるが、句読点は私見によって付けた。

用例ごとに「通釈」・「注」・「考察」の三項を設ける。「注」は語句の解釈に重点を置くが、主な本文の異同その他関係事項にも触れる。「考察」は本文の注釈に基づく「幽玄」の考察である。

1 「永万二年『中宮亮重家朝臣家歌合』花二番」

左勝

うちよするいほの波のしらゆふは花ちるさとのとほめなりけり

右

散りちらずおほつかなきにはなざかり木のもとをこそすみかにはせめ

左、風体は幽玄、詞義非凡俗。ただし、花をしらなみ、しらゆふなどよむはつねのことなれど、なみによせつるときは、うみ、川をひき、ゆふとかけつれば、もり、やしろともいへるや、よしあ

別当隆季

三河

武 田 元 治

りてきこゆらん。花ちる里のとほめならば、五百重のなみのしらゆふならずともや侍るべからん。右、ふることもをとかくひきよせられたるうちに、かの伊せのみやすどころの歌は、山ぢにて、古郷のとくいぶかしかりけるに、散りちらずきかまほしきといへるこそ、ことにをかしきを、このもとの歌には落不落おぼつかからむことばは、花をおもふ心しふかからずやきこゆらん。すゑに、すみかにはせめといひはてられたるほど、余情たらずやあらん。なほ、なみのしらゆふは歌のさまたけまさりてや。

【通釈】

左勝

うち寄せる、限りなく重なり合う波、白木綿とも見まがう波、それは桜の花の散る里の遠見の様子であった。

右

桜の花盛りは、花が散るか散らないか、心もとないで、その木の下を選んで、住む所にしよう。

左の歌は、その姿が幽玄で、詞といい心といい、平凡なものではない。ただし、桜の花を白波や白木綿などと詠むのは普通のことであるが、花を白波に例えた時には海や川を挙げ、花を白木綿と関連させた場合には森とか社とか詠んだのが、より所のあるもの

別当隆季

三河

として受け取られるであろうかと思う。花の散る里の遠見の様子を詠むのであれば、「五百重の波の白木綿」と言わなくてもよろしかろうかと思えます。右の歌は、古歌をあれこれ取り入れて詠んでおられるが、その古歌の中で、あの伊勢の御息所の歌は、山道で故郷の花の様子が気懸かりで早く聞きたいと思っただ心から、「散り散らず聞かまほしきを」（花が散ったか散らないか聞きたいので）と詠んだのが、特に興味が深いと思われるのであるが、桜の木の下での歌となると、「散り散らずおぼつかなきに」という言葉は、花を思う心がそれほど深くはないものとして受け取られるであろう。歌の終りに、「住みかにはせめ」とハッキリ気持ちを言い切られたあたりも、余情が不足しているかと思う。やはり「波の白木綿」と詠んだ左の歌の方が、歌の姿が格調の高さにおいて優れているように思う。

【注】○隆季 藤原隆季。一一二七—一一八五。○いほへの波のしらゆふ 「五百重の波」は、幾重にも重なって寄せる波。『万葉集』に「荒磯に寄する五百重波」（五七二）とある外、九三六、二四四一等にも「五百重波」の用例がある。「白木綿」は、楮の樹皮で作った白い紐状のもので、櫛などにつけて神にささげる幣とした。これも『万葉集』に「白木綿花に波立ちわたる」（三二五二）と、「白木綿花」として白波が一面に立つ様子の描写に用いた例がある外、九一四、一一一一、一七四〇等に「白木綿花に落ちたぎつ」として波の形容に用いた例がある。なお、このような『万葉集』の用例に基づいて「波の白木綿」という表現が平安後期に成立していたと見られることを、山本一氏が指摘しておられる。（『非秀歌に対する幽玄の批評機能』——『北陸古典研究』第四号）その要所のみ摘記すると、『堀川百首』に「みなわまき常滑走る穴師川ひまこそなけれ波の白木綿」（一三七七、公実）の詠が見え、俊成も『久安百首』に「いくかへり波の白木綿かけつらん神さびにける住の江の松」（八八二、頭広）と詠んでいる。○花ちる里 『万葉集』に「橘の花散る里」（一四七七等）の用例が

あり、『源氏物語』の源氏の歌「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」の場合も「花」は橘の花であるが、この左歌の場合は題が「花」で、桜の花を詠んだもの。○三河 二条院内侍三河。生没年未詳。藤原為業（寂念）の女。○風体 歌の「心」が「詞」に表現された状態を総合的に見て、様式としてとらえる場合に用いられる語。「姿」とほぼ等しい内容を示すものとして用いられているようである。○詞義 詞と心。○ふることどもをとかくひきよせられたる 古歌をあれこれ取り入れて詠んでおられる。俊成がここで「ふることども」とするのは、「散り散らずかまほしきをふるさとの花見てかへる人もあはなん」（『拾遺集』四九、伊勢）のほか、「木のもとをすみかとすればおのづから花見る人になりぬべきかな」（『金葉集』三奏本四九、花山院）などが意識されているのであろう。○伊せのみやすどころ 生没年未詳。伊勢守藤原経蔭の女で、『古今集』の代表的女流歌人。宇多天皇の愛を受け、皇子を生んだ。○山ちにて 山道で。伊勢の「散り散らず……」の歌の詞書に、「斎院屏風に、山みちゆく人ある所」（『拾遺集』）、また「御屏風歌 山に花みにいそぎゆくところ」（『伊勢集』）とある。○このもとの歌 「木のもと」の歌で、直接には三河の右歌（「……木のもとをこそすみかにはせめ」の歌）を指すと思われる。『平安朝歌合大成』七では、判詞のこの部分に「この本の歌」と漢字をあてておられるが、いかがであらう。○不落 「ちりちらず」と読んでよいのであろう。群書類従本・歌合部類版本等には「散不散」とある。○たけまさりてや 格調の高さが優れているのであろうか。「たけ」は歌については格調の高さを意味し、「たけあり」「たけたかし」等の形でも評語に用いられる。

【考察】左歌に対する俊成の判詞に「風体は幽玄、詞義非凡俗」とあるのは、その用語から見ると、『和歌体十種』の中の「高情体」の説明に、「此体、詞雖凡流、義入幽玄」とあるのを受けたのであろう。なお、この『和歌体十種』の評語に基づいて、基俊は『奈良花林院歌合』祝二番判詞に「言凡流をへだてて幽玄に入れり」と記してお

り、そこからも俊成は影響を受けた可能性が考えられる。

「風体は幽玄」と評した点を、左歌に即して考えてみると、この歌は花散る里の遠景を「うちよするいはへの波のしらゆふ」としてとらえていて、イメージの上で、揺れ動く茫漠たる白の世界を表現している点がまず注目されると思う。また、この歌はその表現に用いた言葉が「いはへの波」・「しらゆふ」・「花ちるさ」となど、『万葉集』に見える語が生かされている点も目立つようである。そこに俊成はある格調の高さを認めることから、「詞義非^ニ凡俗^ニ」とも言い、最後に「歌のさまたけまさりてや」とも評しているのではなからうか。

要するにこの左歌は、いわば世俗を離れた独特の幽遠な世界が、ある格調の高さの感じられる古語を通じて表現されているところに、特長が認められるようである。そういう一首としての特長を、詠まれた世界の世俗を離れた幽遠の感じを中心にとらえたのが「風体は幽玄」の評語であり、一方表現に認められる格調の高さの面に重きを置いておさえたのが「歌のさまたけまさりてや」という評語であったかと思う。

2 「嘉応二年『住吉社歌合』旅宿時雨二十五番」

左

実定卿

うちしぐれものさびしかるあしのやのこやのねざめにみやここひしも

右

俊成卿

あはれにもよはにすぐなるしぐれかななれもやたびのそらにいでつる

左歌、ものさびしかるとおき、みやここひしもなどいへるすがた、已に入幽玄之境、よろしくこそきこえ侍れ。右歌は、判者拙歌に侍りけり。依例不能加判矣。

【通釈】

左

実定卿

時雨が降って、もの寂しい、芦のやの昆陽の地の芦ぶきの小屋に目覚めて、都のことが恋しく思われる。

右

俊成卿

心をうつ音を立てて、夜中を通り過ぎるらしい時雨よ、お前も私と同じように旅に出た身なのか。

左の歌は、二句に「もの寂しかる」と言い、「都恋しも」と結びなどした歌の姿が、幽玄の境地に達しているようで、よい歌と思われます。右の歌は、判者である私の拙作です。それで例によって勝負の判定をいたしかねます。

【注】○実定卿 藤原実定。一一三九—一一九一。俊成の甥に当たり、のち左大臣に至る。○あしのやのこや 芦で屋根をふいた小屋の意に、歌枕としての「芦のやの昆陽」が言い懸けられていると見るべきであろう。これは「津の国へまかりける道にて」の詞書をもつ「あしのやのこやのわたりに日は暮れぬいづちくらん駒にまかせて」（『後拾遺集』五〇七、能因）等の用例がある。「昆陽」は今の兵庫県伊丹市のあたり。「芦のや」という地名は今日兵庫県芦屋市に名をとどめているが、昔は今の芦屋より広い範囲について言ったと思われる。○俊成卿 藤原俊成。一一一四—一二〇四。○よはにすぐなるしぐれ 夜中を通り過ぎるらしい時雨。「なる」は伝聞推定の助動詞「なり」の連体形で、ここは小屋の中で音を聞いて、外の闇の中を時雨が通り過ぎていくらしいと判断した心を示す。

【考察】左歌に対する俊成の判詞に「すがた、已に入^ニ幽玄之境^ニ」とある。これに似た評語の先例としては、次のようなものがある。

「興入^ニ幽玄^ニ」（『古今和歌集』真名序）

「義入^ニ幽玄^ニ」（『和歌体十種』）

「幽玄に入れり」（『奈良花林院歌合』祝二番基俊判詞）

「義似^ニ通幽玄之境^ニ」（『中宮亮顯輔家歌合』紅葉二番基俊判詞）

「入^ニ幽玄之境^ニ」（『和歌現在書目録』序）

俊成の判詞は、こういう「幽玄」の用例の伝統を受けていると考えて

よいのであらう。

ところで俊成はこの場合、左歌の「ものさびしかるとおき、都こひしもなどいへる姿」について、「已に入_三幽玄之境」と評している。この一首は、「旅宿時雨」の題により、時雨が降って寂しい旅先の仮の宿に目覚めて都の人を恋しく思う心を詠んでいるが、その心情のかなめを表す語が「ものさびしかる」と「都こひしも」であらう。そして、これらの語が当時はあまり用いられなくなった古風な表現であることは、久保田淳氏が指摘される（『幽玄とその周辺』——『講座日本思想』5）とおриかと思う。「ものさびしかる」の古い用例としては、久保田氏は『長能集』の

鳴けや鳴け山ほととぎす春暮れてものさびしかる人の聞かくに
を挙げておられるが、なお古い用例という意味では、『新撰和歌』に見える作者不明の古歌、

山里はものさびしかることこそあれ世のうきよりは住みよかりけり（二五三）

を加えることもできると思う。（なおこの歌の第二句は『古今集』の通常の本では「もののわびしき」であるが、『和漢朗詠集』では「ものさびしかる」の形を伝えている。）また「都こひしも」の「こひしも」という語形は、『万葉集』の「心悲しも」等に通じる古風な表現と見られる点も、久保田氏の指摘されるとおりであらう。それで俊成は、左歌がそういう古風な語句を通じて幽寂な境地を伝えている点に特長を認めて、この歌の「姿」を「入_三幽玄之境」と評したものと思われる。

なお、俊成の師の基俊が「幽玄」の評語を用いた歌にも、世俗を離れた幽寂な境地に心を向け、それを『万葉集』に見える古風な語句を用いて詠んだものがあつた。長承三年『中宮亮頭輔家歌合』紅葉二番の左歌、

見渡せばもみちにけらし露霜にたが住む宿のつま梨の木ぞ
に対して、判者基俊は、

詞雖_レ擬_三古質之体_一、義似_レ通_三幽玄之境_一。

と評している。俊成がここで左歌に対して「姿、已に入_三幽玄之境」と評したのは、特にその影響を受けたところがあるのではないか。

3 「承安二年『広田社歌合』海上眺望二番」

左持

前大納言兼定

むこのうみをなぎたるあさにみわたせばまゆもみだれぬあはのしま
やま

右

頼政朝臣

わたつうみをそらにまがへてゆくふねもくものたえまのせとにいりぬる
ぬる

左、ことばをいたはらずして、又さびたるすがた、ひとつの体に
待めり。まゆもみだれぬあはのしま山といへる、かの黛色廻_三臨蒼
海上といひ、竜門翠黛眉相對などいへる詩おもひいでられて、幽玄
にこそみえ侍れ。

右又、そらにまがへてゆくふねも、といへるころふかくかすめ
るこちして、くものたえまのせとにいりぬらんほどもおろかな
る心およびがたくして、勝劣不分明。よりて為持。

【通釈】

左持

前大納言兼定

武庫_{むこ}の海を、ないだ朝に見わたすと、青いまゆずみそのままに、美
しく整った阿波_{あわ}の山かけが眺められる。

右

頼政朝臣

海原を空に続くかとも見せて、はるかな沖を漕いで行く舟は、雲の
絶え間の瀬戸_{せと}に入って、姿を消した。

左の歌は、用語上あまり細かい配慮をしないで詠んでいて、枯淡
とも言うべき姿で、これは一種独特の歌体であるようです。「ま
ゆも乱れぬ阿波の島山」と詠んでいるのは、あの「黛色廻_三臨蒼
蒼海上_二」（まゆずみの色の山は、はるかに青海原のほとりに姿を

見せている」と詠んだ詩とか、「竜門翠黛眉相對」（竜門山は青いまゆずみで描いた眉が向き合っていると見える）と詠んだ詩とかが思い出されて、幽玄に見えます。

右の歌もまた、「空にまがへてゆく舟も」と詠んでいるのは、思い入れが深く、定かにとらえきれないところがあるかに思われ、「雲の絶え間の瀬戸に入りぬる」という様子も未熟な私の心には及びがたいものがある、優劣を決めかねます。それで「持」（勝負なし）とします。

【注】○前大納言実定 藤原実定。一一三九—一一九一。○むこのうみ 武庫の海。「武庫」は六甲山の南側の地（今の西宮・芦屋・神戸のあたり）で、その前の海。○まゆもみだれぬあはのしまやま 美女の青いまゆずみそのままに美しく整った阿波の山。それが海の向こうに見られるので「島山」と言った。○頼政朝臣 源頼政。一一〇四—一一八〇。○わたつうみをそらにまがへてゆくふね 海原を空と続くと見せて漕いでゆく舟。沖合はるかに漕ぐ舟が、海と空の接するあたりに見える様子であろう。なお一首は『頼政集』には「わたつ海を空にまがへてこぐ舟の雲の絶えのせとへ入りぬる」の形で見える。○くものたえまのせとにりぬる 雲の絶え間の瀬戸に入って姿を消した。「瀬戸」は海峡であるが、ここは雲の切れ目を「瀬戸」と見なしたのか。○さびたる姿 枯淡な感じの歌の姿。○黛色廻臨蒼海上 「黛」は、まゆずみ。「廻」は、はるかに。この一句は『千載佳句』・『和漢朗詠集』に収められた賀蘭遂の「百丈山」の中の詩句。「百丈山」は天台山にあるという。○竜門翠黛眉相對 この一句は「白楽天詩後集」巻十一に見える「五鳳樓晚望」の中の詩句。「五鳳樓」は梁の太祖が洛陽に建てた楼で、この「竜門」は洛陽の西南にあたる竜門山であろう。○といへるころふかくかすめるこちして『新編国歌大観』では、この部分の中間に読点を付けないが、一般的には「ころ」の後で切って、「といへる心、深くかすめる心地して」と読まれるようである。そして「深くかすめる心地して」とは「幽玄といふ語

を和げたもの」（窪田空穂氏『平安朝文芸の精神』）と解する見方がある。しかし俊成の判詞に「心深し」「心深く」と評した例が多い点などから見て、「といへる心深く、かすめる心地して」と読んでみたいと思う。その見方による私解を「通釈」に記した。なお「考察」に私見を述べる。

【考察】この「幽玄」の用例以下の三用例（3・4・5）は、『広田社歌合』の俊成の判詞に見られるものである。それぞれの要所を抜き出してみると、

幽玄にこそみえ侍れ。（3）

すがた幽玄の体にみえ侍れば、（4）

すがた幽玄にこそきこえ侍れ。（5）

となっている。いずれも前の俊成の用例（1・2）にうかがわれたような先人の用例に従った形跡を特に指摘することができない。それだけ俊成が「幽玄」を自分の評語として使いこなすようになっていたのであろう。

この用例では、左歌の下句「まゆも乱れぬ阿波の島山」を採り上げて、「黛色……」の詩句や「竜門翠黛眉……」の詩句が連想されることを言い、「幽玄にこそみえ侍れ」と評している。俊成がこのように「幽玄」と評した理由を、小西甚一氏は「典拠の詩句から連想される美女のおもかげが余情として間接的な趣を加えている点」（『道——中世の理念』）に認められた。この見方はほぼ正しいであろう。ただこの場合の「美女のおもかげ」は、なまの華やかな美しさを感じさせるものではないと思われる。一首に歌われているところは、青く静かに広がる朝な夕の海のかなたに、整った青いまゆずみを思わせる山影がはるかに見える様子である。ここにイメージされる「美女のおもかげ」は、現実的・世俗的なものから懸け離れたそれであろう。そういう世俗的なものから懸け離れた深い美しさを感じられてくるようなところがある点を、俊成は「幽玄にこそみえ侍れ」と評したものであろうと思う。

なお、「注」で触れておいたが、右歌の「空にまがへてゆく舟も」を挙げた後に続く判詞、「といへるこころふかくかすめるこちして」の部分は、

といへる心、ふかくかすめる心地して

と読まれることが多く、その場合「ふかくかすめる心地して」は「幽玄」といふ語を和げたもの」と見る窪田空穂氏の見解（『平安朝文芸の精神』）がある。また峯岸義秋氏も「深くかすめる心地」以下の注として「これもまた境地として幽玄に入っている歌である」（『新訂歌合集』）と記されるから、同様の見解であろう。これらの見方によると、俊成は右歌に対しても左歌とともに「幽玄」な歌としていたことになる。

しかし、この見解については、疑問に思われる点がないわけではない。まず、俊成が右歌も「幽玄」な歌としていたとすれば、この場合なぜ「幽玄」の評語を用いなかったのであろうか。これは「幽玄」の評語を重ねて用いることを避け、表現上変化を求めたのであろうと言え、それまでのことながら、俊成の判詞には、左右の歌について「ともに幽玄の体なり」（用例8『御裳濯河歌合』二十九番判詞）と評した例があることも無視できない。

次に、「ふかくかすめる心地して」が「幽玄」と同じ内容を示す評語ということであるが、そう見てよいのであろうか。いったい俊成の判詞には、「心ふかし」を、思い入れが深い意味の評語として用いた例が多い。それでこの場合の「ふかく」も前の「心」に続けて、

といへる心ふかく、かすめる心地して

と受け取るのが、俊成の判詞の一般的な語法から見てより自然なのはなからうか。俊成がこれと似た言い方をした例としては、『物思へ」とて『といへる心ふかかるべし』（『民部卿家歌合』久恋一番判詞）などが考えられる。「かすめる心地して」は、『心のあとを』などいへる、いたくかすめる心地して（『六百番歌合』恋一、二十二番俊成判詞）などを参照すると、表現するところが明らかにとらえがたいこと

を言ったのであろう。それで、このあたりを「幽玄」と同じ内容の評語とするのは問題があるかと思う。

4 〔承安二年〕『広田社歌合』海上眺望八番

左持

左兵衛督成範

おきつなみあまのがはにやたちのぼるこぎゆくふねのそらにみゆるは

右

盛方

こぎいでてみおきうなばらみわたせばくもゐのきしにかくるしらなみ

左、これもさきのつがひの左のうたのころにかよへるべし。あまのがはにやたちのぼる、といへるころをかくはみえ侍り。そらにみゆと侍るぞ、かみにみえんやうにきこゆれど、なみのすゑのそらにひとつにみゆる心なるべし。

右、くもゐのきしや、さしたる心ちし侍れど、これもころはおなじすぢなるべし。みおきうなばらなどいへるすがた、幽玄の体にみえ侍めれば、持と申すべし。

【通釈】

左持

左兵衛督成範

海の沖の波が、天の川までたちのぼるかと思われる。沖を漕いで行く舟が空のあたりに見えるのは。

右

盛方

舟を漕ぎ出して、社の沖の海原を見渡すと、はるかな空の果てに、白波がうち寄せている。

左の歌は、これも前の番（海上眺望七番）の左の歌の発想と共通する作と言えるでしょう。沖の波が「天の川にや立ちのぼる」と詠んだ心は、面白く思われます。ただ、舟が「空に見ゆ」とありますのは、上空に見えるように思われるところがあるけれども、これは波の果てが空と続いて見えることを言ったものでしょう。

右の歌は、「雲居の岸」という表現が、特に意識して言ったように思われますけれども、これも発想は右の歌と同様のことに属しているでしょう。「み沖海原」などと詠んでいる歌の姿は、幽玄の姿と見えますから、持と判定することにしませう。

【注】○左兵衛督成範 藤原成範。一一三五—一一八七。○おきつなみ 沖の波。なおこの句で始まる左歌に似た形の先行歌に「池水は天の川にやかよふらん空なる月のそこに見ゆるは」(『後拾遺集』八三九、懷円法師)がある。○盛方 藤原盛方。一一三七—一一七八。○みおきうなばら 御沖海原。この歌合の奉納された広田社の前面の海を神域と見るところから「み沖」と「み」を添えた。広田神社は現在の兵庫県西宮市にある。○くもゐのきし 雲居の岸。雲のある空の果て。「岸」と言ったのは、空の世界が海に接する部分であるためか。この語を用いた先行歌に「おきつしま雲ゐの岸を行きかへりふみかよはさんまぼろしもがな」(『拾遺集』四八七、ともまさの朝臣の妻肥前、また『金葉集』二度本三三一、為政朝臣妻)がある。○さきのつがひの左のうた 『広田社歌合』海上眺望七番の左歌「雲の波わけゆく舟のきえぬるは天の河原にこぎやつける」(俊恵を指す。なお、この歌に対する俊成の判詞に、「天の河原にこぎやつける、といへる心、かの張博望之到_二牛漢_一」_二沂_一二十万里之濤_一といふ句の心をとられて侍り。いとをかしこそ侍れ。」とある。引用の句は大江澄明の作で、『本朝文粹』・『新撰朗詠集』等に見える。○さしたる 特に意識し(て言つた)。

【考察】ここでは、右歌の「み沖海原などいへる姿」を採り上げて、「幽玄の体」に見えると評している。「み沖海原」の語は、この歌合の海上眺望十一番、十二番、十四番の歌に詠まれた「お前の沖」の語と比べると、広田社の神の御前の沖を指す点では同様であるが、言葉のニュアンスの上で異なるところがあるであらう。すなわち「み沖」というと、神の世界に直接属する沖という感じが、さらに「み沖海原」と続けると、その世界が大きな広がりをもつものとして感じら

れてくる点で、「お前の沖」という通常の言い方にはない特殊なニュアンスをもつであらう。そういういわば世俗の世界を超越した深さ広さの感が「み沖海原」あたりの表現に際立って認められるところから、俊成はまずこの部分を判詞に引用したと思われる。ただし、その超俗的な深さ広さの感とは、「雲居の岸にかくる白波」という下句にも認められ、一首全体の特色になっているとも見られるであらう。その意味で俊成は右歌の「すがた」を「幽玄の体」と評していると思われる。

5 「承安二年『広田社歌合』述懐二十八番」

左持

なにしおへばたのみぞかくるにしのみやそなたにわれをみちびくやとて

阿闍梨姓阿

右

かづらきやすがのはしのぎいりぬともうきななはやよにとまりな

浄縁

左は、はじめ七番のつがひにや侍りつるうたのことばのつづき、いささかかはれるに侍り。

右は、すがのはしのぎなどいへるすがた、幽玄にこそきこえ侍れ。ただし、いづれもこころのおもむきあはれにみゆ。なほ又持と申し侍るべし。

【通釈】

左持

阿闍梨姓阿

西の宮の社は、西を名にもつので、とりわけ頼りに思う。仏の浄土のある西の方に私を導いてくださるかと思つて。

右

浄縁

葛城山の、菅の葉を押し伏せて、山深く入ったとしても、私についてのつらい噂は、やはり世の中に残るにちがいない。

左の歌は、さきに七番に出ていたかと思ひます歌の、言葉の続き

方が、少し変わったような作です。

右の歌は、「菅の葉しのぎ」などと詠んでいる姿が、幽玄なものに思われます。ただし、左右の歌のどちらも、心のあり方があわれを誘うところがあると思われまゝ。やはりこの二首の優劣も持たしように思います。

【注】○阿闍梨姓阿 尊経閣文庫蔵本には「姓阿」とあるが、他本の「性阿」が多分正しいであろう。生没年未詳。○なにしおへば（西の宮）は「西」を名としてもっている。○西の宮 西宮神社。現在の兵庫県西宮市にある。もと広田神社の摂社。○そなたに そちらの方向に。極楽浄土のある西の方向に。○浄縁 尊経閣文庫蔵本には「浄縁」とあるが、「静縁」のことであろう。生没年未詳。比叡山阿闍梨。○かづらき 葛城山。今の奈良県の西、大阪府・和歌山県の境あたりの山脈を広く言ったようである。修験道の霊場。○すがのはしのぎ 菅の葉を押し伏せて。「すが」は「すげ」と同じで、カタツリグサ科の植物。「菅の葉しのぎ」という歌詞は、『万葉集』に、「奥山の菅の葉しのぎ降る雪のけなば惜しけむ雨な降りそね」（三〇二、大納言大伴卿）、「高山の菅の葉しのぎ降る雪のけぬといふべくも恋の繁けく」（一六五九、三国真人入足）等の用例がある。しかし平安時代には、『古今集』に後者の類歌「奥山の菅の根しのぎ降る雪のけぬとかいはむ恋の繁きに」（五五一）が収められてはいるが、あまり用いられず、清輔の『和歌初学抄』には「古歌詞」の『万葉集』の部に挙げてある。○七番のつがひにや侍りつる歌 『広田社歌合』述懐七番の左歌「名にしおはば西てふ神をたのみおかんそなたをつひに願ふ身なれば」（俊恵）を指す。なお、この歌に対する俊成の判詞は「西てふ神をたのみおかん、といへる姿をかしく心あはれにこそおほえ侍れ」。

【考察】ここでは、右歌の「菅の葉しのぎなどいへる姿」を採り上げて、「幽玄にこそきこえ侍れ」と評している。「菅の葉しのぎ」という言葉は、「注」に記したように、『万葉集』の歌に用例が見られ、清輔

の『和歌初学抄』に万葉の「古歌詞」として挙げる言葉である。するとこの場合、葛城山の奥深く分け入ることを歌うのに、特にこの万葉の古歌詞を用いたことによって、現実の世俗の世界から遠ざかる感じを印象づけるところがあるかと思う。俊成はこのあたりの表現を一首の特色を示す眼目と見て、「菅の葉しのぎなどいへる姿」が「幽玄」に聞こえると思つたのではないかと思う。

なお、同じ『広田社歌合』で俊成が「幽玄」と評する歌でも、前のこぎいでてみ沖海原見たせば雲居の岸にかくる白波（用例4）が、いわば幽遠な世界へ心を向けたところのある歌とすると、

葛城や菅の葉しのぎ入りぬともうき名はなほや世にとまりななは、いわば幽寂な世界へ心を向けたところのある歌と見られるのではなからうか。二首は現実の世俗の世界から離れた世界を表現した特徴をもつ点は共通すると思われ、その点に関して俊成は「幽玄」の評語を用いたと考えられるけれども、二首を対照すると、そういう違いがあるようである。

そして実はこれと同様のことは、俊成がより早い時期に「幽玄」と評した歌についても指摘しうらと思う。

うちよするいほへの波のしらゆふは花ちる里の遠目なりけり（用例1）

（用例2）

うちしぐれものさびしかる声のやのこやの寝ざめに都こひしも（用例2）

前者は幽遠なものへ心を向けたところのある歌、後者は幽寂なものへ心を向けたところのある歌と見られるのではなからうか。

これは俊成の師の基俊が「幽玄」と評した二首の歌に、幽遠志向の認められる歌（『奈良花林院歌合』祝二番左歌）と、幽寂志向の認められる歌（『中宮亮頼輔家歌合』紅葉二番左歌）があり、そこから俊成は影響を受けたものと思われる。

6（承安三年『三井寺新羅社歌合』九番古郷郭公）

左持

中納言君

なにはがたあさこぎゆけばほととぎす声を高津の宮になくなり

右

少輔君

ふるさとの御垣が原のほととぎす声は昔にへだてざりけり

左歌、詞存古風興入幽玄。但、郭公高声強非其庶幾歟。右歌、すがた心よろしくは見え侍るを、彼、石上ふるき都の時鳥、といへる素性が歌にかよひ過ぎてや侍らむ。但、これは御垣の原とおきて、むかしにへだてずといへるこそ、物の上手のしわざと見え侍れ。されどふるき詞おほし。初めて勝とも申しがたし。持なるべし。

【通釈】

左持

中納言君

難波鴻を朝漕いで行くと、ほととぎすが、声を高くあげて、昔の高津の宮のあたりで鳴いている。

右

少輔君

故宮の地の吉野の御垣が原のほととぎす、その声ばかりは今も昔と隔てなく聞こえる。(ほかの様子は変わってしまったが。)

左の歌は、その用語が古代の風をとどめ、その感興が幽玄の境地に達している。ただこの場合、ほととぎすが声を高くあげると詠んでいる点は、あまり望ましい詠み方ではないように思えます。右の歌は、歌の姿も心もよいとは見えるのですが、あの「いそのかみ古き都のほととぎす」と詠んだ素性法師の歌に似通い過ぎているかと思えます。ただし、この右の歌は、「御垣が原」という言葉を置いた上で、(垣は隔てになるものだけれども) ほととぎすの声は「昔にへだてざりけり」と詠んでいる点は、上手な作者のしわざと思われまふ。しかし昔の歌の言葉が多い。この歌をこねば、〔仍て〕この歌を勝とは決めかねます。持というところでしょう。

【注】○中納言君 三井寺(園城寺) 関係の僧。生没年未詳。○なにはがた 旧淀川河口付近の海。今の大阪市のあたり。○高津の宮 今の

の大阪市東区にあった宮。仁徳天皇の皇居として記紀にその名が見える。ここでは宮の名の「高津」に、ほととぎすが声を高くあげて鳴くことを言い懸けている。○少輔君 三井寺関係の僧。生没年未詳。○御垣が原 大和の国の歌枕で、今の奈良県の吉野にあるとされた。

「ふとさとは春めきにけりみ吉野のみかきの原をかすみこめたり」(天徳四年『内裏歌合』、平兼盛『金葉集』三奏本、四にも) など知られる。○庶幾 こいねがうこと。○石上ふるき都の時鳥、といへる素性が歌「いそのかみふるき都の郭公声ばかりこそ昔なりけれ」(『古今集』一四四、素性)。なお、詞書に「奈良の石上寺にて郭公の鳴くをよめる」とある。○初めて勝とも申しがたし 「通釈」のように一応解しておいたが、「初めて」の意味が明らかでない。群書類従本の「仍て」の形なら意味明瞭である。

【考察】左歌に対する判詞の「詞存古風、興入幽玄」は、基俊の判詞「辞存古風、頗有逸興」(『中宮亮顯輔家歌合』恋十番) からの影響も考えられるが、また『古今和歌集』真名序の「或興入幽玄、但見上古之歌、多存古質之語」あたりからの影響も考えられそうである。(「存古風」という語句だけでは、同じ真名序の中に別に見える。)

すると俊成は、左歌に「詞」の面で「古風」、特に上古風の特徴を見出すとともに、それと関連して「興入幽玄」と評していると思われる。では、左歌のどのような点に「詞」の面での「古風」、特に上古風の特徴が認められるであろうか。これは仁徳天皇の難波の「高津の宮」が詠みこまれていることもあるが、「朝漕ぎゆけば」などの詞の続け方に上古風の特徴が見られるかと思う。「朝漕ぎゆけば」そのままの形ではないが、『万葉集』には「朝漕ぎくれば」と詠んだ次のような歌がある。

名児の海を朝漕ぎくればわたなかに鹿子ぞなくなるあはれそのか

こ(一四二)

そして、この「朝漕ぎくれば」は、清輔の『和歌初学抄』に万葉の「古

歌詞」として挙げている。なお『万葉集』には「難波渇漕ぎづる舟の」で始まる歌(三一八五)もあり、要するに左歌の詞は『万葉集』の歌を思わせるところがあると言えそうである。こういう点は、前の用例(5)の『広田社歌合』述懐二十八番右歌、「葛城や菅の葉しのぎ入りぬとも……」と共通しており、歌全体としては、それよりも一層直線的で古風な詠み方がされていると言えるかも知れない。

このように現実の世俗の世界を離れて、難波の高津の宮の昔の世界をはのかに思い浮かべさせるように表現されている点が、「興入_三幽玄_二」と評せられているのであろう。

なお、この左歌に対する評語には、「但、郭公高声強非_三其庶幾_一歟」と書き添えられている。これは一首の特徴を「幽玄」にかかわると見る場合、ほととぎすが声高く鳴くと詠んでは、現実的な臨場感が強くなりすぎて、高津の宮の昔の情景をはのかに思い描くのに適当でない、と俊成は見ているのではないか。

この歌合で直後に置かれた十番の右歌は、この歌と第三句以下が類似した作で、

いにしへをおもひ出でてやほととぎす声を高津の宮になくらん
であるが、俊成は「高津宮も、いにしへを思ひ出でてやと言ひては、いま少しよく聞ゆるなるべし」と評している。この歌では初めから「いにしへを思ひ出でてや」として、ほととぎすが声高く鳴く現在を詠んでいるので、問題はないのであろう。ただこれは「あはれ」な歌であっても、「幽玄」な歌ではなかった。

7 「文治三年頃『御裳濯河歌合』十八番」

左聯

おほかたの露には何のなるならんたもとにおくは涙なりけり

右

こころなき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕ぐれ
しぎたつさはのといへる、心幽玄にすがたおよびがたし。但、左

歌、露にはなにのといへる、詞あさきにて心ことにふかし。勝つべし。

【通釈】

左聯

広く野におく露は、何が露になるのであろうか。私のたもとに置く露は、涙の露である。

右

ものの情趣の分らないこの身にも、しみじみとした情趣はおのずから知られる。鳴の飛び立つ沢の、秋の夕暮よ。

「鳴立つ沢の」と詠んだのは、心が幽玄で、姿が及びがたい高さをもつ。ただし、左の歌で、「露には何の」と詠んだのは、言葉が単純なように見えて、思い入れが特に深い。左の歌を勝と判定しよう。

【注】○なるならん 「なるやらん」・「なりぬらん」の形の本もある。○こころなき身 もの情趣に心を動かされることのない出家の身、という風に解する説と、謙遜の言葉と見て、ものの情趣の分らないこの身、という風に解する説とがある。一般に前者の説が多いが、久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』では、「心なし」の用例が「謙辞乃至は否定的評価を与えられるべき状態」を示すのが普通である点から、後者の立場を採る。○鳴たつ沢 鳴の飛び立つ沢。「鳴」はくちばしと足の長い中形の水鳥。「たつ」を佇立すると解する見方も提示されているが、鳴はその羽音の高い点で詩歌に採り上げられる伝統があるので、やはり飛び立つと見るのがよい。

【考察】西行の晩年の自歌合『御裳濯河歌合』の俊成の判詞には、「幽玄」の用例が二例見られる。

これはその一つで、右歌について、「鳴立つ沢の」を眼目として挙げ「心幽玄に姿及びがたし」と評している。単に「あはれ」を「秋の夕暮」に感じたというだけでは具体性を欠くし、例えば「大原山の秋の夕ぐれ」という程度でも常套的な言い方であるが、「鳴立つ沢の秋

の夕暮」となると、西行が独自にとらえた幽寂な境地を示しているようである。そういう幽寂な境地に作者の心が達していると思われる点を、俊成は「心幽玄に」と評し、またその心が伝わるように表現した歌の姿を「姿及びがたし」と評したものであらう。

なお、俊成はこの歌を勝負の判定としては負としている。これは一首の上句のやや説明的とも見える点が感心できなかったことにもよるのであらうか。少なくともこの時期の俊成は「幽玄」を最高理念として考えていないようである。

8 「文治三年頃『御裳濯河歌合』二十九番」

左持

かりくれし天の川原と聞くからにむかしの波の袖にかかれる

右

津の国の難波の春は夢なれやあしのかれはに風わたるなり

ともに幽玄の体なり。又持とす。

【通釈】

左持

ここは、あの狩をして日が暮れた（と業平が歌に詠んだ）天の川原、と聞くとともに、昔がしのばれて、川の波が袖にかかるように、涙が袖を濡らした。

右

（能因が歌に詠んだ）摂津の国の難波の春の美しい景色は、夢であつたのか。今日の前の芦の枯れ葉を、風が吹きわたっていく。

左右ともに幽玄の体の歌である。これも持とする。

【注】○かりくれし天の川原 狩をして日が暮れたと業平が歌に詠んだ天の川の川原。業平の歌は、『古今集』によると、「惟喬親王の供に、狩にまかりける時に、天の川といふ所の川のはとりにおりあて、酒などのみけるついでに、みこの言ひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、さかづきはさせ、と言ひければ、よめる」の詞書を

もつ歌、「狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の川原に我は来にけり」（四一八）。「天の川」は、今の大阪府枚方市の地名、川の名であるが、それを空の「天の川」に見立て、「たなばたつめ」（織女星）に宿を借りよう、と歌ったもの。なお、この業平の歌によつた西行の歌は、『山家集』板本には初句「あくがれし」の形で見え、その詞書に、「天王寺へまゐりけるに、交野など申す渡り過ぎて、見はるかされたる所の侍りけるを問ひければ、天の川と申すを聞きて、宿からんと言ひけんこと思ひ出されてよみける」とある。○聞くからに 聞くとすぐに。○むかしの波の袖にかかれる 昔がしのばれて涙で袖を濡らした、というのが主な気持で、それに川の波が袖にかかることを織りこんで表現したもの。○津の国の難波の春 摂津の国の難波の春。能因が歌に詠んだものとして言っている。能因の歌は、『後拾遺集』によると、「正月ばかりに津の国に侍りけるころ、人のもとにいひつかはしける」の詞書をもつ、「こころあらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを」（四三三）。○夢なれや 夢であったのか。「なれや」は、助動詞「なり」の已然形に助詞「や」が付いた形で、この場合はここで切れて、疑問・詠嘆の意を表す。

【考察】ここでは西行の左右の二首について、「ともに幽玄の体なり」と評している。この場合左右の歌は、それぞれ昔の歌人の歌を詠んだ土地をたずね、その昔の風雅の世界をしのぶ態度に基づいて詠まれている。そして、その昔の歌は、

狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の川原に我は来にけり（『古今集』四一八、業平）

こころあらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを（『後拾遺集』四三、能因）

の二首で、七夕の織女に宿を借りようとか、難波の春景色を見せたいとか歌っていて、艶な色調をもつ歌と言えるであらう。西行の左右の歌は、そういう艶な美しさをもつ昔の歌人たちの興趣の世界を、現実から遠いものとして、ほのかに感じさせるように表現しているところ

があると思う。その点を俊成は二首の特徴としてとらえ、「幽玄の体」と評したものであろう。

俊成は晩年に「幽玄」を艶な面影の世界と結びつけて言うことで「幽玄」の伝統を新しく生かしたと思うのであるが、この用例にはすでにその傾向がうかがわれるようである。

9 「建久四年『六百番歌合』秋上六番残暑」

左持

女房

うちよする浪よりあきのたつたがはさてもわすれぬやなぎかげかな

右

信定

秋あさき日かげになつはのこれどもくるまがきはをぎのうはかせ
右方申云、左歌宜之由を申す。左方申云、秋あさき、聞きにくし。くるる籬もころえすや。

判云、左歌、浪より秋のなど、いとをかしくは見え侍り。やなぎかげにとりてぞ、たつたがはは、もみぢながるるなど、ふるくよめるは、いますこし幽玄に侍るを、柳陰は中比もよみ侍れど、すこし俗にちかくや侍らん。右歌、さきに二番の右にや侍りつる歌のおなじ心にぞ侍れど、秋あさき、聞きにくしとおおぼえ侍らず。くるるまがきも艶にこそきこえ侍れ。左は首尾相叶ひ難なく見え侍り。右は余情あるていに侍るべし。なずらへて持とすべし。

【通釈】

左持

女房

竜田川の、打ち寄せる波から秋は立つかと見えるが、それにしても涼みなれた柳の木陰がなお忘れがたい、残暑のころである。

右

信定

秋になって間もない日ざしに、まだ夏の暑さは残っているが、暮れかかる垣根のあたりには、萩の上葉を吹く風の音が、秋の訪れを告げている。

右方からは、左の歌は結構と思うとの申し出があった。左方からは、右の歌の「秋浅き」が耳慣れず、「暮るる籬」も納得しかねるという申し出があった。

判者としての意見は、次のとおりです。左の歌は、「波より秋の」などと詠んでいるのが、大層興味深いと思われます。ただ「柳陰」について言うと、竜田川は「紅葉流るる」などと古く詠んでいる歌は、今少し幽玄な感じがするのですが、「柳陰」は中古にも歌に詠んだ例があるものの、やや俗に近い感じがあるでしょうか。右の歌は、先に二番の右に出ていたかと思えます歌と同様の発想をもつ歌なのですが、「秋あさき」は、（左方の非難するような）耳慣れない言葉とは思われません。「暮るる籬」も、（左方の非難は当たらず）優雅な言葉と思われず。それで、左の歌は一首全体としてよく調和のとれた作で、特別な欠点はないように思われます。右の歌は余情を特徴とする歌体と言えるでしょう。同列の歌と見なして持と判定しましょう。

【注】○女房 歌合に出詠する天皇・上皇・摂政関白等の高貴の地位にある人は、作者名を女房とすることがあった。（判者が高貴の人に気がねなく判定しようという配慮から出たと言われる。）この場合は、藤原良経。一一六九—一二〇六。良経は『六百番歌合』当時左大将であったが、摂家である九条家に生まれており、この歌合を主催した。○たつたがは 竜田川（立田川）。大和の国の歌枕。奈良県の北西部、生駒山地の東側を南へ流れ、大和川と合流する。平安時代から紅葉の名所として歌われることが多い。この歌では秋が「立つ」を川の名に懸けて言っている。○信定 この歌合の際の仮名で、実は慈円。一一五五—一二二五。藤原良経の叔父にあたり、天台座主を務めた。○まがき 籬。竹や柴などで目をあらく編んだ垣。○をぎのうはかせ 萩の上を吹く風。「萩」はイネ科の多年草で、湿地に群生する。ススキに似ているが葉が広く大きい。それで萩の葉に風を感じ、特にその葉ずれの音に秋を感じることを歌った例が少なくない。「秋

はなほゆふまぐれこそただならね萩の上風萩の下露」(『義孝集』四)など。○たつたがはは、もみぢながるるなどふるくよめる 竜田川の紅葉を詠んだ古歌は多いが、次の二首などは俊成の判詞の言葉に近いであろう。「竜田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦なかやたえなむ」(『古今集』二八三、よみ人しらず)、「竜田川もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」(『古今集』二八四、よみ人しらず)。この二首はまた『古来風体抄』にも抄出されている。○柳陰は中比もよみ侍れど「柳陰」を竜田川について詠んだ歌に、「夏ごろもたつた川原の柳陰すずみにきつつならすころかな」(『後拾遺集』二二〇、曾禰好忠)がある。『古来風体抄』では俊成は「中古」として「古今、後撰、拾遺」のころを挙げており、好忠は『拾遺集』初出の歌人であるから、俊成の言う「柳陰」を詠んだ「中比」の歌として、右の歌などは相当する可能性があると思う。○二番の右にや侍りつる歌 『六百番歌合』秋上二番右歌、「秋をあさみてる日を夏とおぼめけばくれゆく空の萩の上風」(家房)を指す。

【考察】『六百番歌合』の俊成の判詞には、「幽玄」の用例が二例見られる。この二つの用例は、いずれも批評の対象とした歌について「幽玄」と評したものでなく、対象とした歌の一部の語句を問題とし、古歌に用いられた別の表現の方が「幽玄」であると指摘している。その点、他の俊成の評語の「幽玄」の用例の場合と異なっている。

ここでは、左歌に用いられた「柳陰」の語を問題にして、「竜田川」を詠む場合、「紅葉流るる」などと詠んだ古歌の表現の方が「今すこし幽玄」であると言い、「柳陰」は「今すこし俗に近くや侍らん」と評している。この評語から当面読み取られることは、ここで俊成の言う「幽玄」が「俗」と対立する性質をもつらしいことである。

それにしても、「竜田川」を詠む場合、「紅葉流るる」と詠む方が「今すこし幽玄」であり、「柳陰」では「今すこし俗に近く」なるというのは何故であろうか。

「柳陰」という語は、「注」に挙げたように、『後拾遺集』に「たつた川原の柳陰」と詠んだ曾禰好忠の歌(二二〇)が収められている外は、八代集の中では『新古今集』に西行の一首(二六二)の用例があるのみである。したがって歌語としては目新しい言葉であったと思われる。その点、「竜田川」という伝統的な歌枕に関する優雅なイメージに配合するには、やや現実的すぎて適当でないところがあると考えられたであろう。

「竜田川」に「紅葉流るる」と詠んだ古歌として俊成の念頭にあった可能性のある『古今集』の歌二首(二八三、二八四)を、「注」に挙げておいたが、これらの歌を俊成は『古来風体抄』に抄出した際に、「この二首の歌、さきのは奈良の帝、聖武天皇の御歌、つぎのは柿本人麿が歌なり」と左注に記している。これによれば、俊成は二首を上古の歌と見ていたわけで、そこに現実や世俗を遠く隔たる美の世界を感じ、その点を「幽玄」と言ったのではないかと思う。

10 [建久四年『六百番歌合』秋上二十四番鶉]

左歌

月ぞすむとはまことにあれにけりうづらのとこをはらふあきかぜ

右

定家
寂蓮

しげき野とあれはてにけるやどなれやまがきのくれにうづらなくなり

左右互申宜之由

判云、兩首故郷の風体、共に優に聞え侍るを、右、籬のくれや、ふしみのくれになどいへるこそ、幽玄に聞え侍るを、籬のくれ、事せばくや侍らん。左のすゑのまさるべくや。

【通釈】

左歌

定家

月が澄みわたり、月の光の占める里は、本当に荒れてしまった。鶉の伏す床の草むらを、秋風が吹き払っていく。

右

寂蓮

草の茂る野となつて、住まいは荒れはてた。夕暮の色に包まれた垣根のあたりで、鶉が鳴いている。

左右双方から、それぞれ相手方の歌をよいと思う旨の申し出があった。

判者の意見としては、この二首は古びて荒れた里の様子を詠んでいて、ともに優雅に思われますが、右の歌で「籬の暮」とするのは問題があるようで、「伏見の暮に」などと詠んだのは幽玄に聞こえますけれども、「籬の暮」では事の様子が狭く限定されるかと思ひます。左の歌の下句「鶉の床を払ふ秋風」がまさっているかと思ひます。

【注】○定家 藤原定家。一一六二—一二四一。○月ぞすむ 「すむ」は「澄む」と「住む」を言い懸けたと見られる。○うづらのとこ 鶉の伏す床である草むら。鶉はキジ科、草深い所を好むとされた。『古今集』の「野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君がこざらむ」(九七二、よみ人しらず)、または『伊勢物語』の「野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君はこざらむ」(百二十三段、二〇七)の歌は有名で、この左右の歌もこれを踏まえて詠んだものである。○寂蓮 俗名は藤原定長。一一三九頃—一二〇二。俊成の養子となる。○しげき野 草のおい茂る野。なお、この語で始まる右歌は、『古今集』の「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」(二四八、遍昭)によるとともに、また前記の「野とならば……」の歌を踏まえて詠んだ作であろう。○ふしみのくれに 伏見の暮に。「伏見」は歌枕であるが、大和の国の伏見(菅原の伏見)と呼ばれ、現在の奈良市菅原町のあたり)と、山城の国の伏見(現在の京都市伏見区のあたり)との、二つの地があった。ただし歌に詠まれた際に、採り上げ方の相違はほとんど認められないようである。「伏見の暮に」という語句そのままの形が見られる古歌としては、『後撰集』の「菅原や伏見の暮に見わたせば霞にまがふをはつせの

山」(一二四二、よみ人しらず)がある。

【考察】この俊成の判詞では、右歌の「籬の暮」の語を問題にして、「伏見の暮に」などの表現の方が「幽玄」であると言ひ、「籬の暮」は「事せばくや侍らん」と評している。この評語からまず推測されることは、ここで俊成の言う「幽玄」が「事せばく」あることと対立するような性質をもつらしいことである。

しかし、「籬の暮」よりも「伏見の暮」の方が情景が広くなるのは事実であるとしても、この歌の場合「籬の暮」ではなぜよくないのか、また「伏見の暮に」が「幽玄」に聞こえると言うのは何故であろうか。

「籬の暮」については、一般的にその使用を俊成が認めなかったわけではないと思う。これは、前の用例(9)の俊成の判詞に、「暮るる籬も艶にこそきこえ侍れ」と評していた点からも察せられるが、『千五百番歌合』の

たちかへりなほ故郷にすみれ咲く籬の暮に春風ぞ吹く(二百七十五番左、公経)

に対する俊成の判詞には、「籬の暮に春風ぞ吹く」と詠んだのを「艶に侍るべし」と言っている。これらの判詞によれば、俊成が一般に「籬の暮」と詠むことを否定したとは思われない。したがって俊成がここで「籬の暮」を問題にした真意は、この右歌に即して考えられるべきであろう。

一体この右歌は、『古今集』の「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」(二四八、遍昭)によるところもあるが、また『伊勢物語』の深草の里の女が、

野とならば鶉となりてなきをらむかりにだにやは君はこざらむと詠んだ話によっていることを、俊成は意識したと思われる。周知のとおり、俊成自身、この歌物語の世界を面影にして詠んだ歌がある。

夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里(『久安百首』、『千載集』二五九)

俊成はこの歌を詠んだ『久安百首』の時、深草の里の女の話の初めて歌に詠み入れたことを、『慈鎮和尚自歌合』（八王子七番）判詞に特に記している。そしてこの歌は『千載集』の外『古来風体抄』にも収められているから、『無名抄』に伝えるように俊成の自賛歌であったかと思われる。すると俊成としては、自分がそうにとらえていた歌物語の世界が、場所を手近な籬のあたりに限定して現実化されることに、不満を感じたのではなからうか。

一方、俊成が「籬の暮」に代る表現として提示した「伏見の暮」について考えてみたい。「伏見の暮」という語句を含む先行歌としては、『後撰集』の一首（一二四二、「語釈」参照）が知られている。ただ俊成は「籬の暮」に合わせて「……に」の形で提示したと見られるので、ここで俊成の意識した可能性のある伏見の暮の歌が「……に」の形にこだわらず考えてもよいかと思う。その場合、俊成が『千載集』や『古来風体抄』に撰び、「夕されば野への秋風……」の歌に続けて置いた次の一首が、注目されるように思う。

なにとなくものぞ悲しき菅原や伏見の里の秋の夕暮（『千載集』二六〇、俊頼）

ここで歌われているのは大和の菅原の「伏見」であるが、歌枕として同名の山城の「伏見」と結びつく。そして山城の「伏見」は地域的に「深草」と結びつく。（後の歌であるが定家も「深草の里の夕風かよひきて伏見の小野に鶉なくなり」（『拾遺愚草』七五四）と詠んだ例などもある。）それで、『伊勢物語』の深草の里の女が鶉の歌を詠んだ世界と微妙に結びつくものとして、この俊頼の伏見の暮の歌あたりが俊成の心に浮かんではなかったか。

ともかく、右歌は「籬の暮」では手近な場所に局限されるが、「伏見の暮」であれば歌物語の世界を面影とすることなども可能で、その点が「幽玄」と言われているかと思う。

11 〔建久末年頃「慈鎮和尚自歌合」聖真子九番、冬の心、山里にて〕

左
冬がれの梢にあたる山風のまたふくたびは雪のあまぎる

右勝
深山木ののこりはてたる梢よりなほしぐるるは嵐なりけり

左歌、心詞幽玄の風体なり。ただし、右歌の、残りはてたるといひ、なほ時雨るるはなどいへる、すがた心ことに宜しくきこえ侍り。まさるべくや侍らん。

【通釈】

左

冬枯れの梢にあたる山風が、さらに吹きつける時、雪が空もかすむばかりに舞う。

右勝

深い山の、時雨も木の葉も降り尽くして、最後まで残った常盤木の梢から、なお時雨の音がすると聞こえたが、それは強い山風の音であつた。

左の歌は、心も詞も幽玄の姿である。しかし、右の歌の、深山木の「残りはてたる」と言い、その梢から「なほ時雨るるは」などと詠んだ、歌の姿・心は、とりわけ結構に思われます。右の歌がまさっているかと思えます。

【注】○あまぎる「天霧る」で、空がかすみわたる。『万葉集』では「天霧合しぐれをいたみ」（一〇五七）等の用例が見え、『古今集』には「梅の花それとも見えす久方のあまぎる雪のなべてふれれば」（三三四、よみ人しらず、左注に柿本人麿）の歌が見える。○のこりはてたる梢「時雨も木の葉も降り尽して最後まで残った常盤木の梢。」（谷山茂氏『歌合集』）という注が適切であろう。○なほしぐるるは「いまだにやはり時雨のような音がするのほ。」（谷山茂氏『歌合集』）

【考察】『慈鎮和尚自歌合』には、俊成の「幽玄」の用例が二例見られるが、これはその一つである。

左歌に対して「心詞幽玄の風体なり」と評したもので、評語が簡単

であるだけに、左歌に即して「心詞幽玄」の意味を探る外はない。

この左歌は客観的な叙景歌と言ってよきそう、描かれるところは、冬の深山木の梢、そこに吹きつける山風、そして「雪のあまぎる」様子などである。要するにきびしい冬の山里の風景であるが、ここに作者の心を読み取るとすれば、このような風景をとらえた作者の心も世俗を離れてきびしい自然と一体化しようとする心であろう。そして、さらに言えば、空もかすむばかりに一面に舞う雪とその奥にあるものに向かって動く心とも言えるかと思う。

一首で特徴的な歌詞は、やはり結句の「雪のあまぎる」であろう。

「あまぎる」は、「注」に記したように『万葉集』に見える古語である。この語を用いた古歌で俊成が特に印象にとどめていたと思われるのは、『古来風体抄』に抄出した『古今集』中の一首、

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば（三三
四 よみ人しらず）

であろうが、俊成は『古来風体抄』に『古今集』の左注を受けて「この歌人麿が歌と申す」と書き添えている。それで俊成は多分この歌に、とりわけ「あまぎる雪」という歌詞に、古代的な表現を感じていたかと思う。

俊成は慈円の左歌の特徴を、このような世俗を隔たる心や、それを表現する古風な歌詞に見いだすところから、「心詞幽玄の風体」と評したのである。

ただ俊成は、左歌の「幽玄の風体」としての特長を認めながらも、番えられた右歌の、心は同様の面があっても、含みのある歌詞で独特の自然な屈折を見せた姿をより高く評価したことは、判詞の示すとおりである。

12 「建久末年頃『慈鎮和尚自歌合』十禅師十五番跋」

おほかたは歌は、かならずしもをかきふしをいひ、事の理をいひきらんとせざれども、本自詠歌といひて、ただよみあげたるに

も、うちながめたるにも、なにとなくえんにも幽玄にもきこゆる事有るなるべし。よき歌になりぬれば、そのことば姿のほかに景気のそひたるやうなる事の有るにや。たとへば、春花のあたりにかすみのたなびき、秋月の前に鹿のこゑをきき、かきねのむめに春の風のほひ、嶺の紅葉にしぐれのうちそそきなどするやうなる事の、うかびてそへるなり。つねに申すやうには侍れど、かの月やあらぬ春やむかしのといひ、むすぶてのしづくにこるなどいへるなり。なにとなくめでたくきこゆるなり。

【通釈】

およそ歌は、必ずしも面白い趣向を詠んだり、事の筋道を明瞭に言い尽くそうとしたりしなくても、もともと詠歌という言葉の示すように、普通に声に出してよんだ場合にも、また抑揚をつけて朗詠した場合にも、（声調の上で）何となく艶にも幽玄にも感じられることがあると思われます。一方、よい歌になると、その言葉や姿の伝えるところの外に、ほのかなイメージが併せて感じられるようなことがあるかと思ひます。例えば、春の花のあたりに霞がたなびくとか、秋の月の前に鹿の声を聞くとか、垣根の梅に春の風がにおうとか、峰の紅葉に時雨が降りかかるとか、そのような様子が、イメージとしてほのかに思ひ浮かべられ、併せて感じられるのです。いつも申すことのようにではありませんが、あの「月やあらぬ春や昔の」と詠んだ歌や、「むすぶ手のしづくに濁る」と詠んだ歌があります。こういう歌は、何となく結構に思われるのです。

【注】○本自詠歌といひて 「本自」は、もとより。「詠歌」は、歌を声に出してうたうこと。俊成は『古来風体抄』では「もとより詠歌といひて、声につきて、よくもあしくもきこゆるものなり」と言っている。○えん 艶。一般的には優雅な美しさを指す語であるが、俊成の「艶」については、「優美な対象が醜化せられた、微かな、遮られた状態にある時えんとなり、それをこまやかに感ずる心がえんではな

からうか。」(福田雄作氏「俊成の艶」——『定家歌論とその周辺』)という指摘がある。○景気 中世の歌論用語としての限定的な用法では、主に風物に関するほのかなイメージを言う。「おもかげ」と同様の觀念と見られる。○月やあらぬ春やむかしの「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(『古今集』七四七、在原業平)。「むすぶてのしづくににるなどいへるなり」「むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」(『古今集』四〇四、紀貫之)。「なり」の校異は、山岸本「は」、彰考館本「が」、松平本等この語なし(日本古典文学大系『歌合集』による)。

【考察】『慈鎮和尚自歌合』は日吉七社に奉納された歌合で、本文は十禅師に奉納された十五番の後に添えられた俊成の文章から、俊成が「幽玄」の語を含めて和歌観を記した部分を抄出した。

この抄出部分の直前に「所存かさねて申しのぶべく侍るなり」とある一文も示すように、俊成は本文と共通点のある和歌観を、建久六(一一九五)年の『民部卿家歌合』跋にも、また建久八(一一九七)年の『古来風体抄』にも記している。いずれも歌の声調の方面の要素を重視する点が共通するのであるが、この建久末(一一九八)年頃の成立と見られる『慈鎮和尚自歌合』十禅師十五番跋では、前の二つの場合がない新しい見解も加えている。

新しい見解の第一は、歌の声調によってもたらされる効果を記した中に初めて「幽玄」を挙げている点である。すなわち要素のみを摘記すると、

艶にもをかしくもきこゆる姿のあるるべし(『民部卿家歌合』)

艶にもあはれにもきこゆる事のあるるべし(『古来風体抄』)

艶にも幽玄にもきこゆる事あるるべし(『慈鎮和尚自歌合』)

となっており、「艶」と並ぶものは、初めは「をかしく」、次に「あはれ」であったのが、それに代って新しく「幽玄」が挙げられている。新しい見解の第二は、「よき歌」の備える特長として、声調の方面の要素以外に、初めて形象の方面の要素が挙げられ、「ことば姿のほかに

景気のそひたるやうなる事」と記されている点である。この場合の言外の「景気」は、歌からおのずと思い浮かべられるほのかなイメージを言い、俊成が従来判詞に用いていた「おもかげ」と同様の内容を示す言葉であろう。「景気」及び「おもかげ」については、旧著『中世歌論をめぐる研究』の中で用例を挙げて考えておいた。

それで本文に記されている俊成のこの時点の和歌観では、よい歌の備えている特長として、「艶」と並んで新しく「幽玄」が採り上げられ、また「景気」も「おもかげ」と同様の内容を示すと思われる語として、新しく採り上げられている。ここで「艶」と「幽玄」と「景気」がよい歌の特長とされているのは、俊成が後に「幽玄」を「艶」な「おもかげ」と結びつけたと思われることから見て、注目に値すると思う。ただここでは、「艶」と「幽玄」の相互の関係はなお明らかでないし、「艶」も「幽玄」も声調に関する特長として挙げられていて、「景気」と結びつく点は示されていない。しかし俊成が「幽玄」の内容を発展させていたとすると、その途中の一段階の様相を示すものとして注目されると思う。

13〔建仁元年(八月十五夜) 撰歌合〕三十四番 左深山曉月 右野月露涼

左勝

有家朝臣

はなをのみをしみなれたるみよし野のこずゑにおつる有明の月

右

内大臣

しら露にあふぎをおきつ草のはらおぼろ月夜も秋くまなさに

右歌、幽玄の事に思ひよりて侍れど、左、うるはしくよろしき歌

なりとて、為勝。

【通釈】

左勝

有家朝臣

ひたすら花だけを愛し惜しんできた吉野山の、その桜の木の梢のあたりに傾いた有明の月よ。

右

内大臣

白露のおく野の草の上に思い出の扇を置いて、あの春のおぼろ月夜のことを思う。秋のくまなく照らす月のもとの。

右の歌は、幽玄なことに思い及んで詠まれています。左の歌は、一首の詠み方が整っていてよい歌ということで、左を勝とします。

【注】○有家 藤原有家。一一五五—一二一六。○内大臣 源通親。一一四九—一二〇二。○しら露にあふぎをおきつ「しら露もあはれふかきは」(内閣文庫本)その他本文の異同がある。この一首は田中裕氏の指摘された(『中世文学論研究』)ように、『源氏物語』花の宴の巻を踏まえていると見れば歌意は通じると思われる。「あふぎをおきつ」の形も(田中氏は「句意をとり難い」として「あはれふかきは」の形によられたが)このままで理解できるように思う。一首の花宴の巻との関連の具体的なことは「考察」で触れる。

【考察】右歌に対して「幽玄の事に思ひよりて侍れど」と評している。右歌については、能勢朝次氏が「表現にやや晦冥な所があつて、十分な作とは称し難いかと思ふ」(『幽玄論』)と言われたような面があり、多分そのために「うるはし」と見られる左歌に負けたものである。ただし右歌は、すでに指摘されているとおり『源氏物語』花宴の一節によって詠まれたもので、そう見れば一応理解しうる歌である。次に花宴の巻から関連する一節の要所を挙げてみる。(右歌で採り入れた可能性のある語には傍線を付して示す。)

(1)宮中の花の宴の後の夜ふけに、光源氏は「おぼろ月夜に似るものぞなき」と口ずさんで来る女に会い、「深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ」と詠み、一夜を共に過ごす。

(2)源氏に名を聞かれた女は、「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」と詠み、源氏は「いづれぞと露のやどりをわかむまに小笹が原に風もこそ吹け」と詠む。

(3)源氏は女と会ったしるしに、扇を取り替えて出た。

右歌はこの場合の歌題「野月露涼」によって秋の月夜の露の置く野べの情景を歌うに当たって、上記のような花宴の巻の春の夜の艶な世界を重ね合わせる趣向をとったものであろう。

俊成はすでに『六百番歌合』冬上十三番で、

見し秋を何に残さむ草の原ひとへにいひつなる野辺の気色に(五〇五、良経)

の歌に用いられた「草の原」の語について「聞きつかず」との非難があつたのを抑えて、

何に残さむ草の原といへる、艶にこそ侍るめれ。

と言ひ、さらに、

花の宴の巻はことに艶なるものなり。源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり。

とも言っている。

それで俊成はこの場合も、「草の原」を詠んだ通親の右歌が花宴の巻の世界を用いていることを心得た上で、「幽玄の事に思ひよりて侍れど」と評しているはずである。すると「幽玄の事に思ひよりて」というのは、右歌が『源氏物語』花宴の巻の艶な世界を面影として重ねるように仕立てた発想について言ったものと思われる。そしてこの場合「幽玄」は、その面影の世界を現実からの距離に即してとらえた評語であろうと思うが、幽寂とか幽遠とかの世界でなく、艶な面影の世界にかかわるところに、晩年の俊成の「幽玄」観の特色がうかがわれると思う。

ただこの通親の右歌は、発想の上で「幽玄の事」に思い及んだものとは認められても、表現が不十分で、そのため「うるはし」と見られる左歌に負ける結果になったのは、当然のことであつたと見られる。

14「建仁二・三年頃『千五百番歌合』二百七十一番」

左

女房

かぜふけば花のしら雲ややきえてよなよなはるるみよしの月

右

兼宗卿

はなゆゑにをしむけふぞといふならばかへりてはるやわれをうらむ

左歌、よなよなはるるみよしの月、秋の空ひとへにくまなからむよりもえんに侍らむかしと、おもかげ見るやうにこそ覚え侍れ。右歌、をしむけふぞといふならばなどいへる詞、たしかに理きこえては侍るべし。ただし歌のみち、よなよなはるるみよしのの月など、幽玄におよびがたきさまにあらまほしく侍る事なり。

【通釈】

左

女房

風が吹くと、桜の花の白雲と見えたのが、少しずつ消えていって、夜ごとに光の澄みわたる吉野山の月よ。

右

兼宗卿

桜の花のために過ぎていくのを惜しむ、春の終わりの今日である、と言ったならば、春がかえって私を恨むことであろうか。

左の歌で、「夜な夜なはるるみ吉野の月」と詠まれた春の月は、秋の空の月が少しの曇りもなく澄みわたっているのよりも、さぞ艶な美しさを感じられることでしょうと、その面影が目の前に見るように思い浮かべられます。これに対する右の歌で、花のために「惜しむ今日ぞといふならば」などと詠んでいる言葉続きは、言おうとする事の筋道が明確に理解できるには違いありません。ただ歌の道においては、「夜な夜なはるるみ吉野の月」などという風に、幽玄で及びがたいところを備えた姿であってほしいものと思う次第です。

【注】○左 勝負判の注記のある本では「左 勝」とする。○女房 この場合は、後鳥羽院。一一八〇—一二三九。○かぜふけば花のしら

雲ややきえて 「春風のやや吹くままに高砂の尾上にきゆる花の白雪」(『長方集』二八、『新勅撰集』一〇〇では第五句「花の白雲」)、「吉野山梢に花のちるままにたえだえになる峰の白雲」(『長方集』三

一)等からの影響があるか。○兼宗 藤原兼宗。一一六三—一二四二。○はなゆゑにをしむけふぞ 「今日」は、三月尽の今日の意。「花しあらば何かは春の惜しからん暮るとも今日は嘆かざらまし」

(『後撰集』一四四、よみ人しらす)を日本古典文学大系『歌合集』に引く。(初句「春しあらば」とあるのは誤植であろう。)○秋の空ひとへにくまなからむよりもえんに侍らむかし (かすんだところのある春の月は、秋の空の月が一点の曇りもなく澄みわたっているのよりも、艶に見えることでしょう。「艶」については、用例12の〔注〕で触れたが、「優美な対象が醜化せられた、微かな、遮られた状態にある時」艶となるといった福田雄作氏の見方が、この場合よく適合すると思われる。○おもかげ 歌論用語としては、「景気」と同様、ほのかなイメージとも言うべきもの。○などいへる詞、たしかに理きこえては侍るべし この「詞」の後に読点を付けて句切る読み方は、『新編国歌大観』による。日本古典文学大系『歌合集』その他、従来は「などいへる」の後に読点を付けて句切り、「……などいへる、詞たしかに理きこえては侍るべし」と読むのが一般であったように思う。いずれにも読めそうであるが、同じ歌合の俊成の判詞で似た言い方をした場合を求めて、「などいへる」の後に「詞」または「心」の続く例について見ると、「……などいへる心、又勝劣わきがたく見え侍り」(二百六十二番判詞)という例があることなどによって、一応『新編国歌大観』の読み方に従っておく。なお「理きこえて」は、言おうとする事の筋道が理解できる状態を言ったものである。『源氏物語』の末摘花の巻に「御歌も、これよりのは、ことわりきこえて、したたかにこそ。」とある。

【考察】俊成の残した「幽玄」の用例の中で、これは最後のものになる。

この俊成の判詞は、まず左歌の「夜な夜なはるるみ吉野の月」が秋の澄んだ月よりも「艶」でその「面影」が見るようであると評し、次に右歌の言葉の続け方が事理明白なものであることを言い、しかし歌

の道においては「夜な夜なはるるみ吉野の月」などのように「幽玄に及びがたきさま」であるのが望ましいと述べている。

「幽玄に及びがたきさま」という言葉は、『御裳濯河歌合』十八番判詞（用例7）の「心幽玄にすがた及びがたし」と形の上で似た点もあるが、この「幽玄」は、「すがた」に対する「心」に限定して言われたものではない。この「幽玄」は判詞全体から見ると、『慈鎮和尚自歌合』十禅師十五番跋（用例12）の「幽玄」観につながり、それを作品に即して具体的に述べた趣があるように思う。

そのつながる点の一つは、歌の価値は事理明白なことなどとはあまり関係がないとして、「幽玄」であることを重んじている点である。また今一つは、「艶」や「面影」（『慈鎮和尚自歌合』では「景気」と言っているが「面影」と同様の内容を表すと思われる）を「幽玄」とともに、よい歌の特長として挙げている点である。ただ、前には「艶」と「幽玄」を並べて挙げ、「面影」に相当する「景気」との結びつき方も明らかでなかったが、今度は左歌の句について「艶」で「面影」が浮かぶことを言い、同じ句を後に「幽玄」と言っているから、三者の関係がかなり明らかになったところがあると思う。三者の関連には直接言及してはいないけれども、この場合「幽玄」は「艶」な「面影」と結びつけて意識されていると見るのが妥当かと思う。

この点は「幽玄」とされる歌自体の性質からも考えられることである。この『千五百番歌合』のすぐ前の建仁元年（八月十五夜）撰歌合『三十四番で俊成が「幽玄」の評語を用いた（用例13）通親の右歌は、艶な面影を立ち添わせる発想をもつ作である点に、先に注目しておいた。ここで俊成の「幽玄」と評する後鳥羽院の左歌が「艶」で「面影」の浮かぶ作であることは、俊成自身が言っている。

この場合俊成は左歌の中で特に下句の「夜な夜なはるるみ吉野の月」を採り上げている。この月は吉野の春の月であり、本来秋の月のような澄明な月とは違っており、「艶」なものと思われる。しかもここでは「夜な夜なはるる」月という微妙な変移の相がとらえられ、空

間的にも時間的にも定かでないイメージをもたらしているかと思う。そしてその微妙な変移は、一首では「花の白雲」が次第に消えていくのに伴うこととされているので、現実や常識を超えた深いところで美の実相に迫っているとも言えると思う。そういう「艶」な「面影」の世界の、いわば現実からの距離が、この場合「幽玄」と言われているのではないかと思う。

以上、俊成の「幽玄」の用例十四例に即して見てきたが、全体を通して言える主なことは、初期の用例と晩年の用例では違った面が認められることである。

初期の用例では、基俊の「幽玄」観を忠実に継承する態度が目立つ。それは判詞の文言の上にも見られるが、また世俗を離れて幽遠あるいは幽寂の世界に心を向けるところのある歌に対して「幽玄」と評する点にも認められる。

それが晩年の用例では、歌の表現する「艶」な「面影」（または「景気」）の世界を、いわば世俗の世界からの距離に即して「幽玄」としてとらえるようになっていいると思われる。「幽玄」の基本的な意味は変わっていないのであるが、ここには俊成が「幽玄」を新しく発展させた点が見られると思うのである。